2025年度宮城学院女子大学　編入学試験　生活科学部生活文化デザイン学科　小論文

Ⅰ・Ⅱから解答する問題を一つ選んで、あとの設問に答えなさい。

Ⅰ

資料1『「未来の家」限界なし　水道光熱費ゼロ、鏡が健康指南』（日経MJ、2024年1月2日）は、各社が研究開発中の住宅や住宅設備を紹介している。

まずこの資料を読み、あなたが考える「未来の家」のアイディアを、800字以内で説明しなさい。1つの家にアイディアをまとめる必要はなく、複数のアイディアで多種多様な家を提案してよい。また、説明するために解答用紙の余白に図を加えてもよい。

資料１

この部分は著作権の都合上、公表できません。

この部分は著作権の都合上、公表できません。

出典:『日経 MJ』、2024 年 1 月 2 日『「未来の家」限界なし　水道光熱費ゼロ、鏡が健康指南』

Ⅱ

資料 2 はエリック・クリネンバーグ著『集まる場所が必要だ―孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』の一部抜粋である。これを読んで以下の設問に答えなさい。なお、各設問の論述の最初に「問１：」、「問２：」と記し、それに続けて記述すること。

問1.　下線部に「図書館は、デニスの母親としての意識にも変化をもたらし、仕事に復帰しても大丈夫だという自信を与えてくれた」とあるが、デニスはなぜそのような自信を持つに至ったのか。200 字程度で説明しなさい。

問2.　著者クリネンバーグは社会的インフラという概念を、「人々の交流を生む物理的な場や組織」という意味で用いている。公共施設が社会的インフラになるためにはどのようなことが必要か。自身の経験を含めながら 600 字程度で考察しなさい。

資料 2

この部分は著作権の都合上、公表できません。

この部分は著作権の都合上、公表できません。

出典：エリック・クリネンバーグ著（藤原朝子訳）『集まる場所が必要だ―孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』、英知出版（2022 年） 引用にあたり一部改変。

I

出題意図

資料として採用した記事では、自然災害から居住者を守ることができる自立型住宅、居住者の健康管理に役立つ住宅設備、自前で食材供給が可能な住宅、浴槽のみならず人体を洗浄する浴槽が紹介され、住まいと住まい手の悩みを解決しようとする企業努力が読み取れる。

住まい手である学生自身やその家族が、日頃困っていること、悩んでいること、夢見ていることは、新しいアイディアの「種」である。各自、日常の気づき＝問題意識を発端に、未来の住まいについて考察し、自由な発想で提案してもらいたい。

解答例

a）築後年数が経つと、子供の成長に伴って部屋が手狭になったり不足する、あるいは家族構成が変わって部屋が広すぎたり多すぎるなど、床面積や部屋数が居住者のニーズと合わなくなる。

→キッチン、トイレ、浴室といった水回りを中央部に固定、その周囲に部屋単位のユニットを設置／取り外しができ、家族の経年変化に合わせて増やしたり減らしたり自由にできる、組立ブロックのような家。各ユニットは、再生可能な素材を用いて3Dプリンタで製作できる。

→1室あたりの床面積が狭い集合住宅であるが、間仕切壁や床は容易に取り付け・取り外しができるので、上下／左右の住戸と合体／隔離して、間取りを自由に変更できる家。

→壁と床が水平方向および垂直方向の可動式になっており、広さや高さを自由に変更できる伸縮可能な家。

b）近年、局所的な大雨に見舞われ、住宅の浸水被害が絶えない。

→資料の冒頭に紹介されているインフラから解放された自立型住宅で、かつ、水害に見舞われても水に浮かぶ船のような家。

c）悪天候の日は運動不足になり、家にいるとダラダラ過ごしてしまう

→バリアフリーの真逆で、身体のトレーニングができる「健康増進の家」。いずれの機能も解除可能なので、来客時は使用しない。また、住まい手が体調不良や休息する日は使用せず、リラックスして過ごすこともできる。

・エントランスから玄関までのアプローチは迷路になっており、歩数を稼ぐことができる。

・廊下にはトレッドミルが設置されており、自分で設定した一定時間を走ってから室間を移動する。

・居間にはエアロバイクがあり、TVを観たり音楽を聴きながらトレーニングできる。

・洗面台の高さは一般的な高さより低く、バランスボールに座って洗面・歯磨きをする。

・物干し台は雲梯（うんてい）状になっているので、筋肉トレーニングもできる。

（753字）

Ⅱ

出題意図
文章の意図を正確に理解し、それを自分の言葉で説明する力を見る。また子育て支援や公共性について興味を持って考えられるかどうかを見る。

問１解答例
幼い子どもの母親であるデニスは地域の図書館と出会い、子育ての孤独から免れることが出来た。図書館は子どもにさまざまな学びの機会を与えてくれるだけでなく、親にとっても出会いを与えてくれる場所だ。デニスはそこで経験豊富な母親やベビーシッターと出会うことで、子どもとの生活の不安を解消し、必要なら他者に助けを求めてもよいことを学んだ。彼女は図書館通いをする中で子どもと暮らす自信をつけ、さらに子育てしながら仕事をすることについても見通し持てるようになった。(224 字)

問２　解答例
資料にあげられているスワードパーク図書館の児童書コーナーは親どうしがおしゃべりをすることが許されている点が素晴らしいと思った。私の地域の図書館は本が整然と並んでおり、利用者が留まっていられるのは閲覧コーナーだけであり、利用者同士の会話はほぼ禁じられている。おそらくそれは本を読むことに集中できる環境が重視されているからだろうし、利用者も会話する利用者に対してクレームを言う人がいるからだろう。しかし、図書館を社会的インフラという見方で捉えるなら、会話することが出来なければ他者と交流することもできず、その機能を果たせないだろう。せめて日本の図書館でも会話してもよい空間と静かに本を読む空間を分けて作るなどが考えられる。また、資料にもあるように職員の専門性も重要だと思う。図書館でのイベントで知らない人が出会ったり友だちになったりするような取り組みはあまり見たことがない。図書館のイベントと言えば本の作者の講演会や読み聞かせであるが、そのようなイベントも多くの場合、講演者が一方的に自分の話をすることになっていると思う。これらを参加者同士が交流したりこれからつながるきっかけを得られたりするよう、まずは会話をするスタイルにするなど工夫が考えられると思う。職員に求められるものも、図書についての知識だけでなく、どんな工夫があれば利用者間の交流を促進できるのか、こういった点についての専門性を育てることも大事だと思う。(606 字)